

三枝 裕美

今回の研修で最も印象的だったことは、チェルノブイリ原発事故からの教訓として、リスクコミュニケーションの考え方が示されていたことです。北西医科大学とサンクトペテルブルク放射線衛生研究施設で、医療機関における放射線安全管理とリスクコミュニケーションについて説明を受けました。その際にチェルノブイリ原発事故後、放射線健康リスクに関する認識は、一般の住民と専門家の間でギャップがあり、混乱する状況の中で、一般の住民が正しい放射線防護方法を実施することは難しいこと、また平時から、一般の方々と専門家が話し合い、放射線防護対策について情報共有をすることが重要であるということを改めて認識しました。

以前から長崎大学の放射線防護学や被ばく影響学の講義の中で、福島原発事故後も放射線健康リスクに関する一般住民の方々と専門家の間には大きなギャップがあることは説明されてきましたが、福島原発事故で得られた知見はチェルノブイリ原発事故ですでに起きていたことを知り、とても印象に残りました。次年度は、福島原発事故後に影響を受けた自治体でリスクコミュニケーション学の実習があります。

今回の研修で学んだ、放射線防護対策と放射線健康リスクに関する知見をもとに、どのように住民と専門家のリスクコミュニケーションを促進していくか検討していきたいと思います。

私は、大学で医療工学を学び、現在は臨床工学技士として働いています。放射線を学ぶ際に、臨床放射線医学だけではなく、原子力災害医療や被ばく医療学も含めた統合的な学問領域として学ぶ必要性を感じました。今回の研修において貴重な経験を与えて頂き、関係者の皆さまに心からお礼申し上げます。